

学会だより No. 116 2022 年 10 月 1 日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3806 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

HP：<http://dept.sophia.ac.jp/human/philosophy/>

☆第 97 回上智大学哲学会大会のお知らせ

今秋、下記の要領で第 97 回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえ
ご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2021 年 10 月 30 日（日）10：00～16：45

会場：上智大学四谷キャンパス中央図書館 9 階 921 教室

★プログラム

I 研究発表 10:00～12:10

○川崎えり（本学博士後期課程）

クザーヌス『光の父の贈りもの』における〈贈りもの〉”datum”と〈賜物〉”donum”について

○石田寛子（本学博士後期課程）

デカルトの〈白い神〉を超えて

—— マリオンのデカルト解釈から ——

○田村歩（国立茨城工業高等専門学校助教）

〈狂気〉をめぐるフーコー＝デリダ論争再考

II 総会 12:10～12:25

——休憩——

III シンポジウム 13:30～16:45（途中 15 分休憩を挟む）

○アカデミズムの外で生きる哲学

提題者：今井祐里（株式会社セオ商事/newQ）

角田将太郎（NPO 法人こども哲学・おとな哲学アーダコーダ代表理事/東京大学
総合文化研究科）

永井玲衣（本学博士後期課程）

長谷川里奈（ベネッセ教育総合研究所教育イノベーションセンター客員研究員）

堀越耀介（東京大学 UTCP 特任研究員/日本学術振興会特別研究員(PD)）

司 会：寺田俊郎（本学哲学科教授）

IV 懇話会 17：00～18:30

会場：上智大学四谷キャンパス 6 号館 ソフィアンズクラブ

参加費：本学哲学科教員・学生無料、一般 500 円

☆シンポジウム：アカデミズムの外で生きる哲学

寺田俊郎（本学哲学科教授）

哲学を専門的に研究した人々が、その専門性を直接生かして生計を立てることのできる職種は、これまでのところ、大学の研究職か中学・高等学校の教職以外にはほとんど考えられなかった。いずれも就くことのできる人はごく僅かである。もっとも、大学や大学院で学修したことを直接に生かすことができる職種がそれほど多くないのは、哲学に限らずどの学術分野でも同じことで、多くの大学・大学院卒業者が専門とは直接には関係のない仕事で生計を立てることになる。しかし、法学・経済学であればいわゆる士業（弁護士、司法書士、公認会計士など）の道があり、理学・工学であれば企業や公共機関の研究所職員の道があるのに対して、哲学にはそれが無い。

そんな中、研究職や教職以外の場で哲学を生かして収入を得る人々が見られるようになった。哲学を取り入れた企業人や公務員向けの研修、個人に対する哲学的カウンセリングや組織に対する哲学的コンサルティング、哲学を題材とする文筆活動、一般市民に哲学の学びの場を提供することなど、いろいろな生かし方がある。いわばアカデミズムの外で生きる哲学である。そのなかには、もちろん、街角で市民が集まって行っている哲学カフェのように、収入を得ることを目的としないものもある。だが、今回のシンポジウムで取り上げてみたいのは、哲学を生かすことと哲学によって生きることとの、両方の意味をもつ活動である。

アカデミズムの外で生きる哲学は、日本で見られるようになったのこそ最近のことだが、ヨーロッパではすでに 1980 年代に「哲学プラクティス（プラクシス）」として始まっていた。「プラクティス（プラクシス）」は「実践」という意味だが「開業」と日本語訳されることがある。ドイツで或る哲学博士が哲学的カウンセリングを「開業」したのが始まりだった。哲学プラクティスは瞬く間に世界中に広がっていったが、日本では、先進的な試みが 2000 年ごろから散発的に見られたものの、本格的な広がりを見せ始めたのは、早くとも 2010 年以降のことである。

当日は、アカデミズムの外で生きる哲学を実践している方々に、その活動を報告していただき、ともに哲学の多様な「生き方」について考えたい。それは、上述のように、哲学によって生活していくさまざまな道を考えることであるとともに、哲学のさまざまな活用の仕方を考えることでもある。なお、本シンポジウムは下記の科研費研究との共催である。2018 年度～2020 年度科研費研究（基盤 B）「現代社会に生きる哲学教育を構築するための理論的・実践的研究」（課題番号 18H00607、研究代表者：寺田俊郎、繰越金）

☆シンポジウム 提題要旨

今井祐里

（株式会社セオ商事/newQ）

2019 年頃から盛り上がり始めたビジネスにおける哲学のブームは、すでに終わりつつあるように思う。流行の中で「哲学」や「問い」に期待されたことは何だったのか、熱が冷めたあと

で今後残るもの、中長期的な視点で地道に続けていくべきことは何かといったトピックを中心に、哲学の仕事・役割を考察する。

角田将太郎

(NPO 法人子ども哲学・おとな哲学アードコード代表理事/東京大学総合文化研究科)

こどもの哲学 (p4c) は主体的・対話的で深い学びを重視する学習指導要領の改定と流れを共にする形で学校教育を中心に 2010 年代以降広がりを見せた。では学校外での教育においてはどうか。学校外での教育におけるこどもの哲学の広がりの可能性について実際の事例をもとに検討する。

永井玲衣

(本学博士後期課程)

哲学のあり方を探すとき、哲学は誰のものかという問いから出発するのではなく、哲学は誰のものでなくされてきたかという問いから始めなければならないように思われる。本発表では、実践報告も兼ねながら、哲学がどのような仕方になされうるのかについて考える。

長谷川里奈

(ベネッセ教育総合研究所教育イノベーションセンター客員研究員)

哲学について活動することと、活動を哲学的にすることには、大きな違いがある。手元にある何気ない事柄を哲学的思索へと誘うために必要なものは何か。中高生や社会人と取り組んだ哲学対話の経験をもとに語りたい。

堀越耀介

(東京大学 UTCP 特任研究員/日本学術振興会特別研究員(PD))

本報告では、研究者としての活動と並行して、哲学的な思考、対話、知識を民間企業に取り入れる仕事を行ってきた経験について、その実践内容や方法、研究者のキャリアとしての展望という点から提題したい。

＊

☆研究発表要旨

クザーヌス『光の父の贈りもの』における〈贈りもの〉”datum”と〈賜物〉”donum”について
川崎えり（本学博士後期課程）

ニコラウス・クザーヌス（Nicholaus Cusanus, 1401-64）の『光の父の贈りもの』（De dato patris luminis）は、1445年頃の小品群『隠れたる神について』（De quaerendo deum）、『神の探求について』（De deo abscondito）、『神の子であることについて』（De filatione dei）から間もなくして執筆されたと推定される前期のテキストである。この作品は、彼の最後の著作である対話篇『テオリアの最高段階について』（De apice theoriae, 1464, n.16）末尾で関連づけられ、対話相手のペトルスに特に立ち返って読むように促していることから、最晩年のクザーヌス自身においても完成度の高いテキストと自負していたことが窺える。

本発表は、『光の父の贈りもの』における〈贈りもの〉”datum”と〈賜物〉”donum”の区別に注目し、両概念の内実を探ることで、『観想の極致について』へと繋がる彼の世界像の一端を明らかにすることを目的とする。両者の区別については、少なくとも本邦ではあまり注目されてこなかったうえ、Dupréによる独語訳、J.Hopkinsによる英語訳においても明瞭な仕方では反映されていない。

しかし、本書は「ヤコブの手紙」第1章第17節「あらゆる最善な贈りものとあらゆる完全な賜物とは、上方から、光の父から下降する」（n.91）の解釈という体裁をとっている。つまり、「贈りもの」と「賜物」を区別すべき理由はあるのである。じっさい、クザーヌスは、「上方から」「完全な賜物」「すべての最善な贈りもの」「下降する」とそれぞれの言葉を拾い上げて解釈を加えたうえで、神の永遠性から「贈る・贈られる」の関係を明らかにし、「光の父」と諸々の「光」について語っている。したがって、〈贈りもの〉”datum”と〈賜物〉”donum”の語がクザーヌスによってどのように解釈され、それらがどのように諸々の「光」として回収されるのか、「光の父」は何と何を諸々の「光」として贈り、被造物は贈られているのか、というプロセスを見届けて初めて『光の父の贈りもの』における「贈りもの」が詳らかになり、同時にまた『光の父の贈りもの』というテキストの意義も明らかになると言える。

＊

デカルトの〈白い神〉を超えて
—— マリオンのデカルト解釈から ——

石田寛子（本学博士後期課程）

昨今のフランスの哲学者・現象学者にみられるデカルト解釈の潮流にもれず、J-L.マリオン（Jean-Luc Marion, 1946-）も自身の現象学の隘路を開く過程のなかで、最初期の思索から近年の著作にかけて幾たびも、デカルト哲学との対峙を経ている。本発表は、マリオンのデカルト論のなかでもデカルトの〈神〉をめぐる問題を中心として、マリオンのデカルト解釈に通底する

問題構制を概観し、デカルトの形而上学および神-論が存在-神-論としての形而上学を越え出るという事態の理論根拠、そしてこの事態を眼差しうる視座の究明を主眼としたい。

マリオンは、『デカルトの白い神学』(*Sur la théologie blanche de Descartes*, 1981) および『デカルトの形而上学的プリズム』(*Sur le prisme métaphysique de Descartes*, 1986) において、デカルトにおける神-論は「匿名の神」をその名宛人としている「白地小切手の如くに白い」ことを指摘している。その根本原因は、認識論上は優位である自我 (Ego) と存在論上優越する神という「二重化された原理」の間で揺れ動くデカルトの形而上学に見出される。しかるにデカルトの神-論が「白い」限りにおいて、逆説的に、デカルト自身には眼差すことのできない思惟の臨界点の彼方へと、デカルトの〈神〉は、存在-神-論としての形而上学をすり抜け、むしろ越え出るものであることが示唆されるのである。

本発表はその究明を、『プリズム』において展開される「無限 (l'infini)」の問題圏と、初期のデカルト論から約 30 年を経て刊行された『デカルトの受動的思惟について』(*Sur la pensée passive de Descartes*, 2013) のなかで、*cogito* の受動的思惟としてのあり方を見出す境域のうちに洞察したい。マリオンは、デカルトの *cogito* が、「身体 (la chair)」および「感じること (le sentir)」を媒介として到来する「自我」であること (*ego pensant pensif*) を浮き彫りに付し、魂と身体との合一という人間の原初的事実へと〈神〉究明の場を還元するのである。

マリオンのデカルトの〈神〉解釈の根底にあるものは、信仰の手前において、人間存在と神との結節点を見出しうるような普遍的なる場への問いである。この場から、デカルトの〈神〉を問い返すとき、その〈神〉は生の内側から光を当て返す、思惟不可能な事実として現出する。

＊

〈狂気〉をめぐるフーコー＝デリダ論争再考

田村歩 (国立茨城工業高等専門学校助教)

デカルトは、感覚および物体に関する知識を疑うために、錯覚・狂気・夢を持ち出す。具体的には、「この両手そのものやこの身体全体が私のものとしてあるということ」(『省察』) を疑うために、「赤貧の身でいる時に自分は国王であるとか、素裸でいるその時に紫衣をまとっているとか、[...] などと終始言い張っている、そういう誰かしら気のおかしくなった者に自分を擬して考え」ることを提唱している。しかしこのやり方には、「彼らに劣らず私自身が狂人と思われてしまう」という危険性が伴う。この点に着目したフーコーは、まさにこの危険性のゆえにデカルトが、狂気について正面から論じず、身体および物体の一切の存在を棄却することのできる夢の想定へと懷疑を進めてしまっている、すなわち、狂気を省察から不当に排除してしまっていると主張する。加えて、デカルトが狂人を名指す際に〈*amens*〉および〈*demens*〉という法律用語——契約や署名や訴訟において全幅の権利を有さない者——を使用していることに着目し、有効な省察をおこなうための法的な資格剥奪を恐れたデカルトが狂気を意図的に排除したと主張している。

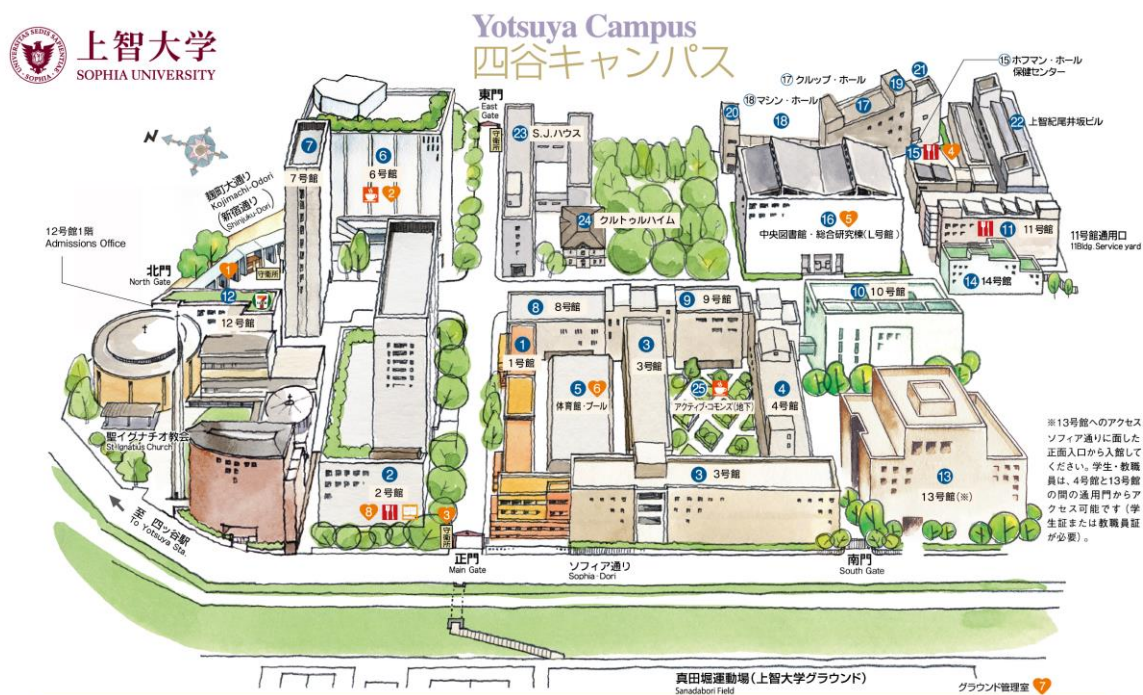
これに対してデリダは、『省察』で狂気について言及されるもそれが即座に退けられたのは、

それが懐疑のための「良い例、啓発的な例ではなかったし、懐疑のよい道具ではなかった」(「コギトと狂気の歴史」)からであると反論する。つまり、第一に、狂気は感覚・身体・物体のすべてについて主体を欺くわけではないため、それらすべてを棄却しうる夢の想定の方が懐疑のための装置として優れているからであり、第二に、「哲学者が、話しているときに自分が本当に狂人なのかもしれないと認めようとする、彼に従っていくほど大胆ではない非哲学者の抵抗にぶつかってしまう」(同)からだ。つまり、狂気は排除されたのではなく、より有益な夢の想定に吸収されたのである。

以上の論争を踏まえ本発表では、次の二つの問題を扱う。第一に、狂気は非理性的であるのか、換言すれば、狂気は理性と相反するのか、という認識論的問題である。なぜなら、デカルトが狂気を意図的に、不当に排除していたというフーコーの解釈は、狂気は非理性的であるという前提に建てられているからである。第二に、デカルトはフーコーの指摘の通り主体の省察遂行の資格剥奪を恐れていたのか、という法的問題である(デリダの言う教育的配慮の問題も含む)。

☆会場案内

下記のマップをご確認のうえ、当日はご移動するようにお願いを申し上げます。



大会会場 …… 中央図書館 (16) 9階 921 教室

昼食会場 …… 6号館 (6) 3階 305 教室

懇話会場 …… 6号館 (6) 6階 ソフィアーズクラブ

※ソフィアーズクラブへお越し頂く際には直通のエレベータをご利用くださいませ。